



## 支援つなぐ架け橋 ——SPANが20周年の祝賀会

視覚障害者向けの ICT 支援などを行なっている特定非営利活動法人 視覚障害者パソコンアシストネットワーク（<sup>スパン</sup>SPAN、北神あきら理事長）は、2月23日、東京・田町の会場で創立20周年記念祝賀会を開催した。英語の「span」には「(橋などを)かける」という意味があり、SPANはパソコンや情報通信技術の利用促進を通して、視覚障害者が生き生きと活躍できる社会を目指すとともに、視覚障害者と晴眼者、企業と個人など、様々な人や団体の「架け橋」としても活動している。（本誌）

### 制度の隙間に対応

開会の挨拶はSPAN理事の松坂治男さん（認定NPO法人タートル理事長）。「過去20年の歩みと、これからのSPANの活動を見通す節目の会。和やかなものにしたい」と挨拶した。

来賓の一人として挨拶をしたのは、SPANとも連携している日本視覚障害者職能開発センター常務理事の杉江勝憲さん。同センターが毎年製作している福祉教育DVDに触れ、今年度は視覚障害者の ICT 活用がテーマであり、SPANの活動や祝賀会の様子も紹介されるとした。SPANには、視覚障害者の雇用維持や転職を支えるために、「今後も頑張ってほしい」と述べた。

乾杯の挨拶は、日本視覚障害者職能開発センター施設長の伊吾田伸也さん。入職からまもないころ、当時、大森海岸駅の近くにあったSPANのインストラクター養成講座で松坂さんの指導を受け、自身でもSPANの講師を務めていた。同センターで

は、就労継続支援B型事業や就労移行支援事業、障害者職業能力開発助成金による事務処理科の運営などを行なっているが、現職復帰を目指す人や学生、自宅での訓練希望者などには、制度的に対応できない。伊吾田さんは、SPANが「法制度の隙間を埋め、自由に講習プログラムを組めることでみんなが助かっている」とその活動を評価した。同センターが運営する就労支援施設・東京ワークショップも今年、設立40周年を迎えることから、「お互いに成長、発展していければ」と語った。

## 当事者のニーズから

SPANの設立は平成11（1999）年11月7日のこと。

現在もSPANの理事を務める園順一さんは、公益社団法人日本網膜色素変性症協会（JRPS）にも所属しており、当時、多くの会員から「音声パソコンの使い方がよくわからない」という声を聞いていた。そのような状況を打破しようと、まずは京都で視覚障害者のICT利用に関するネットワーク（現在の京都福祉情報ネットワーク）を立ち上げた。その試みを東京でも実施すべく動き出したのが、のちにSPANの初代理事長を務める古矢利夫さんだ。全盲の税理士で、自身も視覚障害者のICT活用に対する支援を探し求めている。

そこで、京都のノウハウを東京に移植するための準備会が設立された。メンバーは園さんのほか、中途視覚障害者の復職を考える会（現在のNPO法人タートル）、弱視者問題研究会の新井愛一郎さん（現在はSPAN監事）、松坂さん（設立時は副理事長）、故・中村善<sup>よして</sup>暁さん（設立時の理事）、吉泉豊晴さん（設立時の理事）らが集まり、晴眼の支援者も参加。平成11年3月に東京・